

入選 中学生の部

親切の輪

富士市立鷹岡中学校 一年

石川 緒音

日曜日のショッピングモールは、家族連れや若い人達で大賑わいだ。週末になると家族でよく買い物に来ている。

その日、私は母と妹とお目当てのお店に向かって歩いてた。すると、向こうからショッピングカートを引いたおばあさんがこちらに向かって歩いてきた。

「すみません。」

と声をかけられ、母が返事をした。話を聞くと、エレベーターの場所がどこか分からなくなってしまったようだった。母はエレベーターの方角を指さし、

「まっすぐ進んで看板のあたりを右に曲るとエレベーターがありますよ。」

と伝えた。おばあさんは、

「分かりました。ありがとうございます。」とお礼を言った。そこで、母はもう一度声をかけた。

「エレベーターまで一緒に行きましょうか?」

すると、おばあさんは少し申し訳なさそうに、

「大丈夫です。ありがとうございます。」

と言って歩き出した。私たちはおばあさんが本心にエレベーターにたどり着けるのか心配になって姿が見えなくなるまで遠くから見届けた。母が、

「心配で気になっちゃうんだったら、エレベーターまで一緒に行つてあげればよかったね。」

と笑った。きつとおばあさんは、私たちに遠慮して、大丈夫ですと言ったのではないかと私は思った。

二人のやりとりを隣で見ていて、人に声をかけることは勇気がいることだ、私だったら一緒に行きましようか?その一言をかけられていたのだろうか、と母の行動を見て感じた。そして、私も勇気を出してその

一言をかけられるような人になりたいと思った。それと同時に人の親切は素直に受け取る方が相手も喜ぶのではないかと思った。なぜなら、おばあさんに断られた母が少し寂しそうだったからだ。私が人から親切なことをされた時には、ありがとうございます。助かります。と相手の気持ちをしっかりと受け取りたいと思う。

小さな親切は日常の中に隠れている。親切はされた側だけでなく、ありがとうございますと言われると、親切をした側も嬉しくて温かい気持ちになるということを知った。私もその一歩を踏み出して、親切の輪を広げていきたいら...と思う。親切の輪を広げていくためにはすぐ小さな親切でも、相手のことを思つて行動をすれば、周りの人たちにも少しずつ広がっていくと思う。これからもずっとありがとうございます世界になりますように。

ありがとうとあたりまえ

静岡市立城内中学校 三年

石原 羽琉

「親切にされたこと」を考えても、僕には思いつくエピソードが見あたらなかった。しかし、ふと思いついた言葉が一つある。「ありがとうの反対語は当たり前」だ。この言葉は、小学生の時担任の先生が言った言葉である。この言葉を初めて聞いたときは、まだぼんやりとしか意味が分からなかったが趣味のサッカーが「リスペクト。全ての人に感謝を」の精神を重んじていた影響で「ありがとう」も「あたりまえ」もずっと近くにあったように思う。僕がちょうど担任の先生からこの言葉を聞いた小学校三年生の時、僕は川崎病という病気になった。珍しい病気ではないが、小学生になってから患う人が珍しかったそうだ。この病気を治すには、人の血液で作った薬を点滴しなければならなかった。そして点滴する薬の量は体重に比例して多くなるそうで、僕は

何時間もかけてたくさんの量の薬を点滴してもらった。会ったこともない人のために、献血をして下さっている方たちのおかげで、僕は助けられた。退院した後、しばらくはケガを避けるようにと病院から伝えられた。僕は、サッカーができるかわからなくなってしまったのだ。そんな僕を見て、僕が所属していたサッカーチームの皆さんが、みんなとは別のメニューでサッカーの練習ができるように考えてくださった。病気になってから僕は、今まで当たり前のようにサッカーをしてこられたことを、多くの人に感謝しなくてはならないのだと思うようになった。

僕が所属していたサッカーチームは、保護者から学年ごとに数人の審判を出さなければならなかった。サッカー経験のある保護者はそう多くなく、みんなで審判を押し付けあっていた。だが僕の父は、自分にサッカーの経験がないにも関わらず、サッカーの勉強をして審判資格をとり、僕たちのチームを支えてくれた。試合中には、僕のように熱くなり、審判に対して怒る子供

がいたり、ジャッジに文句を言う観客もいた。それでも父は、僕たちのチームが試合に出られるようにと、何度も審判を引き受けてくれた。他にも、僕がたくさんサッカーを経験できるように、母が家事を調節して送り迎えをしてくれたり、妹や姉が文句を言わず留守番をしてくれたりした。僕は家族みんなの協力があって、今までサッカーができていたのだと感じた。

先生が言った「ありがとうの反対語はあたりまえ」が、今では身に染みて良くなる。僕が今まで当たり前のようにできていたことに、「ありがとう」と思うことができるようになったからだ、あの時先生がかけてくれた言葉が種となり、家族や仲間、僕に関わってくれた全ての人たちが、手をかけ耕してくれた環境で僕は育っている。みんなが当たり前だと思い行動してくれた「親切」に僕はこれからも感謝し続けていきたいと思う。



寄り添って

静岡市立蒲原中学校 二年

磯部 結羽

これは、電車に乗っているときに見かけた出来事だ。

その日は休日だったため、電車内がとても混雑していた。そこに、赤ちゃんを抱えた女の人が入ってきた。外がかなり暑かったので、少しつらそうな顔をして電車内に入ってきた。しかし、座席はいっぱい。それに加えて、席を譲ろうとする人はいない。私は立っているから席は譲れない。どうしよう…。そう思ったときに、優先席に座っていた高齢の男の人が、女の人に、「ここ、座ってください。」と声をかけた。女の人がお礼を言って席に座ったときに、男の人は満足したように優しく微笑み、女の人の上に座っている赤ちゃんと話しかけた。

そのスマートな行動を純粋にかっこいいと思った。あんな風にさりげなく人助

けが出来るようになりたいと思った。

そして、その男の人にあげられると共に、この間の自分の行動とそのときの心の狭さを思い出して、恥ずかしくなった。私はこの出来事に遭遇する少し前に、小さい子供二人を連れた母親に席を譲ったのだが、それは私の隣に座っている子供が近くに立っているお母さんに向かって「隣に座ってよ。」と騒いでいて、周りの客も困っていたから、「めんどくさいな」と思いながら取った行動だったのだ。

私はこれらの出来事を通して、これらの生活の中で、この二つのことを意識しようと思った。

一つ目は、自分から困っている人に、進んで声をかけること。私は困っているときに手を差し伸べてもらえたら本当にうれしいし、少しでも、困っている人を助けて、人助けの輪を広げていきたいと思ったからだ。私は人見知りの性格だから、少しずつ慣れていけるように、コミュニケーションの練習から頑張ろうと思う。

二つ目は、困っている人を助けるとき



は相手に失礼のない態度で、声をかけるようにすること。いやそうな顔をして手助けをしても、相手にまで嫌な思いをさせてしまう。だからこれからは、笑顔を忘れずに話しかけるようにする。相手もこちらまほつこりできると思ったからだ。

私の行動一つで世界を変えることはできない。でも目の前の困っている人や助けを必要としている人に、寄り添うことならできるとを学んだ。初めは上手く人助けできないかもしれない。それでも自分のできる全力をつくして困っている人に寄りそい続けたい。

親切のボタンをつないで

富士市立鷹岡中学校 一年

今村 悠乃

私の住んでいる天間は、緑が豊かで田畑もあり、自然の恵みを感じながら暮らせる地区です。さらに、地域やご近所同士の交流がとても盛んです。私はこれまで、何度も周りの人からの親切を経験してきました。そのいくつかのエピソードを紹介します。

小学生の時、慣れない通学路では下天間の交差点や中天間の踏みきりで、

「おはよう、いつてらっしゃい」

と毎日、地域の方に見守りをしてもらいました。少し元気が出なかった日も、やる気スイッチを押してもらい、その声だけで頑張ることができました。

高学年になり学童を退会、ある時、家の鍵を自宅内に忘れてしまい近所の方に助けを求めました。すると、快く家に入ってくれて、私はそこで母の帰りを待ち

ました。待っている間、学校での話をしたり、宿題をしたり、おやつを食べて楽しいひとときでした。

私の地区（班）は子供が少なく、高齢の方が多いです。母が夕方に仕事から戻りバタバタしていると、玄関のインターホンが鳴り、

「畑で採れたての野菜だよ」

と、高齢の方が作ったなす、きゅうり、オクラ、ししとう等を持ってきてくれました。私は、これらの野菜が大好きです。採れたて野菜はみずみずしく美味しいので、食卓に並ぶとテンションが上がりります。

ある日の中学校からの帰り道。雲行きが怪しくなりポツポツと小雨が降り始めました。すると、隣の家の九十代のおばあさんが（足、腰が弱く）洗たく物を入れるのに苦労していました。私は、洗たくの取り込みをお手伝いし、一緒に話をしながら衣類をたたみました。とても感謝されました。

これまで私は周りに助けてもらうばかり

りでした。でも、中学生になり、私が近所の方をお手伝いする機会があり、少しだけ自分が成長できたと感じました。人は、助け合って生きています。困った時には声を出して支え合っていくことが大事です。

現代はSNSやインターネットで、ここに行かなくても情報が分かる時代です。でも、人と人が向き合って話をしたり、思いを伝える経験は、その時、その瞬間でしか味わえない一番心に響く、残る宝物だと私は思います。今まで自分がしてもらったありがたかった親切、うれしかった言葉を忘れずに、今度はそれを自分が周りに伝えていきたいです。



チャンス

静岡市立城内中学校 二年

籠谷 まい

世界中にあふれる多種多様な言語。その中でも英語は、私にとっても魅力的な言語だった。勉強するのが楽しくて、そのおかげか成績もよかった。私は、「テストでいい点を取る自分」に満足していた。

そんな私が自分の未熟さに気づけたのは、ある忘れられない体験のおかげだった。夏休みに入り、暑さも厳しくなってきたある日の昼、部活動を終えた私が友達三人と一緒に帰っているときに、目の前にひとりの女性が現れた。車椅子に乗ったその人は、私たちをじっと見据えた。と思ったら、いきなり英語でなにか話した。

私たちは、一斉に固まった。しかしそのときの私の心には、尊敬する私の英語の先生がいつか言っていた言葉が浮かんでいた。

「練習できるチャンスを逃すなんて、すご

くもったいいことだと思う。」

もったも、これは練習ではなく本番なのだけれど、これは「チャンス」だ。そう思った私は一歩前に出て、その女性の言葉をよく聴いた。そして、頭が真っ白になった。

なにも、聞き取れなかったからだ。

もう一度たずねても同じだった。なんとなく、どこかに行きたいことは伝わるがそこがどこかわからない。私が友達に助けを求めると、バス、という言葉聞いていた。そして、ヒストリー（歴史）という単語も。近くにある歴史博物館前のバス停に案内した。すると、

「バスはどこ？」

と尋ねられ、またしても頭を抱えてしまった。

結局、女性はツアーのお客さんだった。

歴史博物館の裏の駐車場に停まったバスが発車するの手を振って見送ったあと、私たちは四人でハイタッチをした。みんなの顔には安心感と達成感が混じっていた。

それから数日後。テレビで英語の専門家が話していた言葉が、私の胸に刺さった。

「日本人はわからないことがあっても、笑ってごまかそうとする。でもそれは、相手の話を無視していると思われてしまう。」

聞いたとたんに、数日前の私の姿がよみがえる。二回以上聞き返すのが恥ずかしくて、わかったふりをした私。緊張で相づちのうち方を忘れて、笑ってやり過ごしてしまった私。

私は、なんて馬鹿なことをしてしまったんだろう。

とても恥ずかしかった。あんなに情けないことをして、達成感を感じていた私が。聞き返すことを恥ずかしいと思ってしまう気弱な私が。思い出すだけで、後悔があふれ出る。もっと勇気を出してはつきりと話していれば。わからないことを放置しなれば。

この失敗も、ひとつの「チャンス」だと私は捉えている。当時の私にとっては最大限の親切は、後から思えば後悔の塊だった。親切とは何か。これからも模索し続けたい。

「笑顔の種」

富士市立須津中学校 一年

加藤 蒼葉

大きなことではない。ニュースに載り、感謝状が贈られるような、人の命を助けた、などの大きなことではない。しかし、私の家の近くには毎日、「おはよう」「おかえり」「いつてらっしゃい」と声をかけてくれるおばあちゃんの「あいさつ」がある。これが今の私を作っているのだ。

「小さな親切」運動の八か条、一つ目には「朝夕のあいさつをかならずしまししょう」とある。私はその通りだと、深く感じている。このおばあちゃんのあいさつが私にとって、一番の親切になったからだ。

このおばあちゃんは私が小学生のころから登下校の時間、わざわざ外へ出て挨拶をしてくれる。寒い日や暑い日は体調に気を付けながら、窓から登校を見守ってくれる。最初は恥ずかしく、なんと返せばよいのかわからなかった。返事をするにも困っ

ていた私だが、このおばあちゃんに出会ってから私の生活は少し変わった。

一つ目の変化として、「笑顔が増えたこと」がある。笑顔で挨拶をすること、大きな声、聞こえる声で挨拶をすることの大切さを、おばあちゃんのあいさつから知ったからだ。大きな声で挨拶をすると地域の人には必ず返してくれる。たまに「作業中なのに挨拶をしてもいいのか」と不安になるときもある。しかし、挨拶ができずに足を止めると、地域の人たちは私がいることに気づくらしく、「おはよう」と作業中の手を止めて声をかけてくれる。挨拶から地域の人たちの温かさを知った私は、挨拶が笑顔を増やすのだ、ということに気が付いた。

二つ目の変化として、「学校生活の自分の行動」がある。先ほども言ったとおり、私はあいさつで心が温かくなった。そこから、学校生活の中でも「挨拶」を意識するようになった。小学校生活でのスローガンを決める際、私は『「挨拶」はどうですか。』と発言した。しかし、そのスローガンは採用されなかった。私はなぜ採用されなかつ

たのか、と考えた。すぐに答えが出た。クラスの人たちは「挨拶」の温かさを知らないからだ。その答えからスローガンになくても笑顔で、目を合わせて挨拶をしようと考えようになった。「目を見て、笑顔で挨拶」を実行するたびに、挨拶をした相手も笑顔ができた。今では、私の周囲の人たちも私とともに挨拶をしてくれるようになった。

私の周囲の人の笑顔が増えたのは近所のおばあちゃんのあいさつがあったからだと思う。あのおばあちゃんがかけてくれた「おはよう」「おかえり」「いつてらっしゃい」が私の、みんなの「笑顔の種」になったのだ。私は今、あいさつで同じ地域に住む誰かの、ちょっとした笑顔を咲かせることができる。私は「あいさつ」という名の「笑顔の種」をこれからもまき続けていきたい。



少しの勇氣

静岡県立浜松西高等学校 中等部 二年

川島 温

私はこの夏休みに、少しの勇氣でその場が和むということを実感した。

家族旅行の帰り、私は新幹線に乗った。お盆休みに入り、新幹線は指定席も混雑していた。三人掛けの座席の中央が私の席だった。指定された席に行くと、通路側の席に大きなキャリーケースを前に置いた女性が座っていた。私が、

「すみません。」

とその人に声をかけると、

「ここですか。」

と答え、キャリーケースをよけ奥の席へ通してくれた。彼女は、私の目を見て優しく答えてくれ、嫌な顔などしなかった。混雑した車内でこのような心遣いをしてくれて、とても優しい人だと感じた。

次の駅に着いた時、窓側に座っていた男性が立ち上がった。彼女はその時も、

男性が通りやすいように道を空けていた。その男性が降りていった後、彼女は私に、

「どこで降りますか。」

と聞いた。私は、いきなりの質問だったのと、寝起きだったこともあり、

「浜松です。」

と焦って答えた。そうすると、

「私は新大阪で降りるので、もし良かったら席を交換しませんか。」

と提案してくれた。もしそのままの席だったら、浜松に着いた時、彼女は再びキャリーケースを動かさなければならなかったし、私もまた申し訳ない気持ちになっていただろう。それを想像した彼女は、勇氣を出して私に声をかけてくれた。私は、その発想に驚いた。

私は日常生活の中で、困っている人がいても、周りの目が気になって声をかけることができない。また、もしそれがその人にとって必要のない助けだったらどうしようかと戸惑ってしまうこともある。しかし、この出来事を経験し、少しの勇氣を出すことで、声をかけられた人は困っ

ていたことが解決し、声をかけた人は良い気持ちになるということを知った。また、今回のようにお互いに困っていたことが解決する場合もあるだろう。私も彼女のようになり、近くに困っている人がいたら冷静に考えて声をかけられるような人になりたいと思った。そして自分に自信がつけば、例えばその助けが必要ないと言われても、勇氣を出して声をかけた自分を褒められると思えた。さらに、周りを見る習慣が付けば、自分から進んで行動することができるようになると考えた。

これからは「勇氣は一瞬、後悔は一生」という言葉を胸に置いて生活していきたいと思う。そして、彼女に親切にしても良かったように、私が誰かに親切にし「小さな親切」を繋いでいきたい。

姉から学ぶ親切

学校法人日本体育大学浜松日体中学校 三年

菊池 藍衣利

二〇二四年七月、高校三年生の姉が自転車での登校中、交通事故に遭い、重傷を負ってしまった。その日から姉は、ネットサポーターを装着し、松葉杖での生活となってしまう。同じ学校に通う私は、車で送ってもらった後、自分の鞆を中学校の昇降口に置き、車に戻る。それから姉の鞆を持ち、姉と共に高校の教室に向かった。下校時は、私が教室まで鞆を取りに行き、姉と共に駐車場まで向かった。学校で私にできることは、その位しかなかった。

初めて登校する日、姉は、困ることが多いだろうし、皆に迷惑をかけてしまうだろうと、とても不安そうだった。一日目の学校生活を終えた姉が、「皆が『大丈夫？手伝えることある？』と聞いてくれて、色々助けてもらったよ。本当に助かつ

たし、有難かった。こんなに親切にしてもらって嬉しい。いつか恩返しをしたい。」と本当に嬉しそうに話してくれた。他にも、松葉杖を置き易い様に席を代わってくれたり、教室移動の際には荷物を持ってくれたり、エレベーターがない場所では時間がかかるのにも関わらず、階段と一緒に上り下りしたりしてくれた友達がいたことなど、多くの友達に支えられながら学校生活を過ごしたことも聞いた。私は安心すると共に、感謝の気持ちが込み上げてきた。

また、姉は塾でも多くの方に親切にしていたのだそう。「荷物持ちましょうか」や「何か手伝いましょうか」と言ってくれる人がいたり、姉が出るまでドアを持って待ってくれる人がいたりする。それらが、どれ程有難いことか、姉の話から伝わってきた。人が困っている時に、声を掛けてくれる人や、自然と手助けができる人を、私は尊敬すると共に、自分もそうできる人でありたいと思う。

姉は、「事故になんか遭わなければ良

かった。」と後悔の気持ちをよく口にする。しかし、「こんなに多くの人に親切にしてくださき、親切な人が沢山いることを初めて知った。これは事故に遭わなければ分らなかった。このことだけは、事故に遭って良かったことかもしれない。元気になったら、私が恩返しをしたい。困っている人に親切にしたい。」と言う様になった。

姉はいつかは完治し、松葉杖も必要なくなる。しかし、松葉杖や車椅子での生活を余儀なくされている方もいる。外出すると一人ではできないことにおつかるのではと、不安でいっぱいだろう。「大丈夫ですか？」「何かお手伝いできますか？」などの声掛けがあれば、不安が少しでも和らぐだろう。行動することだけでなく、困っている人に温かい言葉を掛けることも、親切の一つだと私は思う。姉が多くの人に親切にしていたさき、支えられながら過ごせたことを忘れず、私も困っている人に自分のできる親切を行いたいと思う。



親切な心が架ける橋

静岡県立浜松西高等学校 中等部 二年

木下 新菜

私は、祖母から心温まるエピソードを聞いたことで、人間の親切な心について考えさせられました。

私の祖父の畑には、曾祖母が育てていた甘夏の木が植えられています。十五年間休むことなく、毎年花を咲かせ、立派な実をつける甘夏は、近所の方からも楽しみにされていました。なぜなら、祖母は毎年二月から三月にかけて、袋に小分けした甘夏を段ボールに入れ、家の外に置いていくからです。その箱には、「御自由どうぞ」の文字が書かれています。

ある日、祖母が帰宅すると、少なくなつた甘夏が入った段ボールに、一枚の紙切れが百円とともに入っていました。

その紙にはこう書かれていました。

「一袋百円よろしくね いただきました

〇〇在住者」

〇〇には、祖父母が住んでいる町名が書かれていました。これを読んだ祖母は、毎年楽しみにしてくれている近所の方から、メッセージを頂けてとても嬉しかった、と話していました。

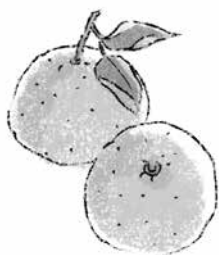
このエピソードを聞いて、大げさかもしれないけれど、ドラマのワンシーンにできるような気がしました。家の外に置くという、近所の人と距離を近づけるようには感じられない行動が、一つの紙切れに書かれたメッセージによって、運命的で感動的なものに変えられたからです。もちろん、ただ、「ありがとう」という気持ちで、持って帰っていく方がほとんどだと思います。その方の行動は、悪いことではないし、祖母も私も、それが普通の持つて帰り方だと思っていました。だからこそ、メッセージを残しておこうという気持ちになってくれた、近所の方の言葉や百円玉は、祖母を温かい気持ちにさせてくれたのだと思います。

改めて、親切な心とは、その心を持つ人だけでなく、してもらう側の人にもあ

ると思いました。また、今回のエピソードで、祖母とメッセージをくれた方が、直接会うことは無かったからこそ、親切な心が人と人をつなぎ、人と人の関係に、見えない橋を架けてくれるのだと気が付きました。

このエピソードを聞いて、無料で甘夏を配布する祖母の行動もすごいと思ったり、無料の甘夏に対して、お金とメッセージを残した近所の方の行動もすごいと思いました。

これから、祖母のように、きっと誰かのためになるだろうという、親切な心を持ちたいし、近所の方のように、求められていること以上の行動を、親切な心で出来るようにしたいと思います。



相手の気持ちに寄り添って

学校法人磐田東学園磐田東中学校 三年

小嶋 詩織

「ありがた迷惑だからやめて。」

ある日、友達にそう言われた。

私は、昔から人のために何かをするのが好きだった。「ありがとう。」と相手が喜んでくれるのがすごくうれしかったからだ。けれど突然友達にそんな事を言われ、私は呆然としていた。どうして親切にしたのに、つらそうな顔をしているの？ どうして泣いているの？ 色々な疑問が浮かぶ中、「ありがた迷惑」そんな言葉が私の頭の中にくり返し、くり返し響いていた。

家に帰ってから、母に今日あった出来事を話した。すると母は、

「友達にこういう親切をして、ありがた迷惑って言われたの。」

と聞いてきた。私は友達の授業の準備を手伝ってあげていた。友達は少しみん

なよりマイペースな子だったから、準備が遅くて、授業に間に合わない事があったからだ。また手伝いは今日だけでなく以前からやっていたと母に伝えると、

「友達は本当に手伝ってほしかったのかな。」

そう聞かれた。あたり前でしょ、とすぐに言えなかった。思い出した事があった。友達は私が準備の手伝いをする度、

「ありがとう。でも自分で出来るよ。」

と言っていた事だ。もしかしたら、友達はずっと前から手伝いを「ありがた迷惑」と思っていたのかもしれない。親切にしているつもりが友達を傷つけてしまっていたかもしれない。そう気づいて今までの自分を恥じた。そんな私を見て母は、

「親切とありがた迷惑は紙一重で区別は難しいかもしれないけれど、相手の気持ちに寄り添って、相手のために自然と行動できるのが親切なのかもね。」

と言った。「相手の気持ちに寄り添って」その言葉が私の頭でくり返しくり返

し響いた。そう言えば私は、「こうすれば絶対相手は喜んでくれる！」と決めつけて、自分の価値観を相手におしつけていた。結局私は、自分が感謝されるために、「自分のために」相手に親切にしているつもりだったのだ。ありがた迷惑と言われるでも仕方がなかった。

それから私は、友達に今までの行動を謝った。友達は優しく許してくれて、今でも仲良くしている。

親切は難しく、勇気がいる事だと思えうけれど、それでも「相手の気持ちに寄り添って」を心がけて少しでも人を笑顔にできるようにしたいと思う。



心に栄養を

静岡県立浜松西高等学校 中等部 二年

小菅 晴琉

この作文を書くにあたって、私は小さな親切について考えました。一番最初思い出したのは、二か月ほど前に駅の改札口で立ち止まっていた白杖を持っている方に声をかけて、ナイスパスをタッチする場所を教えたことです。その方は私がトントんとナイスパスをかざす場所を音で伝えると、そこにピッとパスを反応させて中に入って行きました。その時に「どうも、ありがとね。」と少し頭を下げて言ってくれました。私は役に立てたことが嬉しくて、その後ろ姿をしばらく見つめていました。

食事の時に、家族にも小さな親切について聞いてみました。父は電車内で、床に座っていた小さな子供に席を譲った話をしていました。一緒にいた母親から、「すみませんでした、本当にありがとうございました」

います。」と感謝され、父も私と同じように温かい気持ちになったそうです。

このように人に親切にすると心が温かくなり、嬉しい気持ちになります。それなら毎日、人に親切にしていきたいと思うけれど、そのような機会はあまり多くはありません。それに小さな親切にはそれを行うための小さな勇気も必要になってきます。毎日行うのは難しいのかもしれませんが。それでも、小さな勇気を持つて行動するドキドキやわくわくは心の栄養となり自分を成長させてくれると考えます。

学校の授業でもよく取り上げられますが、二〇一五年から「貧困を終わらせ、地球環境を守り、すべての人々が平和と豊かさを享受できる世界を実現すること」という目的で各国がSDGsに取り組んでいます。この課題は国の事業や企業の取り組みだけでなく、個人の行動も重要になってきます。私が日常生活で行うことが出来る小さな取り組みは、未来の地球や人々への小さな親切なのではないかと考えま

した。例えば、節水やゴミ拾いなどです。節水は安心な水とトイレを世界中に普及させるといふ目標の達成に、ゴミ拾いは町や海を持続的に使えられるようにするという目標の達成につながります。

私は、日常の中にあふれた広い意味での小さな親切を積み重ねていこうと思いました。そして心に栄養を与えてもらい、温かく、思いやりのある人間に育ってきたいです。

旗振りのおじさん

富士市立鷹岡中学校 三年

佐野 ここみ

私の近所に七十代くらいのおじさんが住んでいます。そのおじさんには、毎日お仕事の送り迎えが必要な障がいをもつおじさんがいるという話を最近、母から聞きました。そのおじさんは、通学路の横断歩道に毎朝立ってくれている旗振りのおじさんです。私が小学校一年生の時から晴れの日も

雨の日も、何もしなくても汗が出るような夏の日も、一歩外に出るだけで耳が痛くなるような寒い日も、九年間、毎朝横断歩道に立って旗を振り、登校する子どもの安全を見守り続けてくれています。

私は早起きや学校に行くことが苦手で、いつも遅刻ギリギリの時間帯に登校しています。いつのまにか、おじさんはそんな私に来るまでいつも待ってくれ、私が横断歩道を渡った後に、もう一人の旗振りのおじさんと、

「じゃあ、そろそろ帰りますか。」

とおじさんたちも引き上げるようになりました。そんな姿を改めて思い出し、自分の子どもが自分で登校するという当たり前のような体験をできなかった過去と地域の子どもたちを毎日見守る今を考えると、私には理解できないような複雑な想いがあるのかもしれないと感じました。それでも毎朝欠かさず旗振りを続けてくれているのは、子どもたちに元気に安全に登校してほしいというおじさんの優しい気持ちがあるからこそだと思います。

また、私が今、地域の人に自然と挨拶できるようになったのは、おじさんのおかげだと思います。おじさんは小学生だけでなく中学生や地域の人たちにも自然と挨拶をしています。そんな姿を見て私も地域の人に挨拶することを意識するようになりました。見知らぬ人に挨拶するのは今でも少し怖いですが、しっかり挨拶をしたことで相手が挨拶してくれたり、行ったらっしやいと声をかけてくれたりした時はすごく嬉しくなります。

地域の方が旗振りをし、毎朝見守ってくれることは当たり前のことだと思っていました。しかし、おじさんが私に与えてくれたこと、今まで事故にあわず安全に登校することができたことなどおじさんを初めてする地域の皆さんの思いやりのおかげだと思います。本当にありがたいことで感謝しありません。一日一日は小さな親切でも何年もの積み重ねはすごく大きな親切だと感じました。続けること、これは簡単なことではありません。おじさんのように小さな親切を長く続けることはできなくても、

ほんの少しずつ自分ができる小さな親切を見つけて行動できたらいいと思います。今は、私の弟と妹もお世話になっていきます。健康に気をつけて、これからも私たちを見守り続けてほしいです。

「言葉はなくても」

静岡市立清水飯田中学校 二年

鈴木 日葵

私の家の周りや通学路等の道路は、車通りが多く、かつ道幅もあり広くありません。また、信号の無い横断歩道や歩道が作られていないところもあります。なのでよく車と歩行者間での道の譲り合いがあります。例えば横断歩道では車の方が止まって譲ってくれることが多いです。逆に歩道の無い道路では、車が来ていたらできるだけ早く隅にはけて、道を譲ろう心がけています。この際に運転手の方が会釈をしてくれることがよくあります。

私は少し前まで道を譲ってくれた際に、と



入選

りあえず会釈をするといった様に、そこに気持ちにはあまりこもっていませんでした。ですがある話をきっかけにちゃんと感謝の意を込めてお辞儀まではいかずとも会釈、お礼をするよう心がけるようになりました。

それは学校の放送で、「この学校の生徒が道を譲った際にお辞儀をしてくれてとても温かい気持ちになった」という内容の連絡が来たという話があり、それを聞いてとても感銘を受けたからです。

私は今まで会釈や礼というのを礼儀としてでしかしていませんでした。ですが、そこに気持ちを込めることでただ一つの「動作」だったものが「相手への感謝や敬意」といった「意味」を持った一つの動作になるのかという風に考えるようになりました。それから実際に感謝や敬意を込めてお礼、会釈をするようになってから一つ変わったことがあります。それは、道を譲って運転手の方が会釈をしてくれた時と、時々、道を譲ってくれて私が会釈をした際に軽く頭を下げてくれることがあります。その時になんだかとっても心が温かくなるよ

うになったことと、そこで心が通じ合ったような感じがするようになったことです。

私は今までそういったことをあまり感じたことがありませんでした。私自身礼儀としてだけ会釈をしていましたし、相手は当然他人なのでそこにこれといった感情は持っていないかったように思います。ですが、考え方が変わったことで感じ方が今まではガラツと変わりました。それから毎日が少し明るくなったように感じます。

「言葉はなくとも思いは伝わる」。伝わらなくともそう考えるだけでも生き方というのは変わると思います。感謝の気持ちを感じることが毎日あると思います。そんな時に面と向かって伝えるのは勇気がいります。ただ少しずつその感謝を行動として伝えらるというのはやりやすいと思います。言葉にしないと伝わり難いと言えどもそれまでですが、考え方によってはそこに對する気持ちが変わってくると思います。

私はこの考えを大切に、色々な方々への感謝を忘れずに、毎日を明るく生きていきたいと思っています。

「親切はつながる」

学校法人加藤学園暁秀中学校 三年

中條 碧乃

私はいつも休みが終わるとトゲトゲした気持ちになってしまふ。「学校めんどくさいな」と思っている毎週日曜日の十八時くらいから憂うつな気持ちになってしまふ。ある日私がいつも乗っている電車でドアいっぱいの人が乗っていて「次の電車だな」「暑いし最悪」と思っていたところ、おばさんがわざわざ私を乗せようと降りてくれたことがあった。私はそのとき、胸がジーンとなり温かくなった。家から駅まで歩いていたらときは暗く重い気持ちだったがそのことがあってから、とても明るい気持ちになった。「私のために」わざわざ降りてくれたことに、感動した。今までは誰も私のことなんて分かってくれない、気づいてくれない、とネガティブな気持ちになって悲しくなることもあったけれど、誰かは私のことをきちゃんとみてくれているということに気がついた。

次はこのもらった優しい心を誰かに使おうと思った。

そんなある日、いつものように通学路を歩いていたら坂のほうに人影があった。おばあさんが二人。私の通学路の途中にあるきれいな花だんの作業をしている。この花だんは常にいろとりどりの花が咲いていて、しかも季節の花が何種類も咲いている。その上、その花だんは上り坂の途中にあるので坂を上りきったときにみるとほんとと安心する、つかれた体を癒してくれる存在だ。そんな花だんをつくってくれていた人達に偶然会い、私は嬉しくなった。私もなにかできたらと思い、私は花だんのすみに捨てられていたごみを拾った。初めは勇気が足りなくてそのまま通りすぎようと思ったが、一歩踏み出して拾ってみた。まだおばあさん達は私に気がつかずに作業をしている。私は勇気が足りなくて、言いたくても言えなかった。どうしようと思いきさな声で「いつもありがとうございます」と言った。誰にも聞こえていないだろうなあと考えた。いつも母に声が小さいと怒られているのにどうし

て大きな声でいえないのだろうか、と落ち込み、後悔していたら、

「おかえり、いつもみてるよ。」

私は、耳を疑った。返事をしてくれた。おばあさんの方をみると、笑顔だった。私の存在に気づいてもらえてうれしかった。

明日もきっと良い日になる、と初めて思えた瞬間だった。

親切と偽善

静岡県立浜松西高等学校 中部部 三年
中嶋 公誠

久しぶりに登下校ルートを歩いて思い出したことがある。僕がまだ小学生だったころ、六年間毎日僕たちの登下校を見守ってくれていた見守りボランティアのおじさんがいた。

僕の小学校にはありがとう集会という、見守りボランティアや図書ボランティアの方にお礼を言ったり話したりする機会があった。そのときに僕はいつもの見守りボランティアのおじさんに「なぜずっと見守りボ

ランティアを続けていられるんですか？嫌になったりするときはありますか？」と聞いたことがある。なぜボランティアを続けていられるのか疑問だった。お金がもらえるわけでもないのに、毎朝早く起きて長時間立っていないといけない。辛くはないのだろうか。おじさんは「正直言うと雨の日や寒い日はやりたくないときだってあるさ。でもこうして続けていればいつか自分に親切が周ってくるときがある。やらぬ善よりやる偽善だな。」と言われた。

「やらぬ善よりやる偽善」当時の僕は全く意味がわからなかった。ただすごかった。いと思うたのは今でも覚えている。意味を知った今の僕は、改めてかっこいいと思うと同時に尊敬もした。人は偽善ばかりの人を偽善者と嫌い、善を好む。だが本当に善が良くて偽善は悪いことなのだろうか。例えばバスで席に座れず困っているおばさんがいて、それを見た人が恩を売るために席を譲ったとする。席を譲るという部分を見れば親切になるが、恩を売るためと考えるとそれは偽善に変わる。だが親切だろうか



偽善だろうが席をゆずってもらったおぼさ
んにとつてはどちらも親切に変わりはない。
実際、何の見返りも求めず、自己満足もな
く、ただただ人を助け続けられるような本
物の善人なんて存在しないと思う。親切だっ
てそうだ。人に何かをしてあげるとき、「こ
こで親切にしたら今後いいことがあるかも」
「親切にした俺優しいな」などと思ったこと
はないだろうか。こういった思いだつて一
種の偽善になつてしまう。だが肝心なのは善
偽善ではない。善、偽善なんてただの二文字
と三文字の言葉にすぎず、形はなく目には見
えない。だからこそ本当に大切なのは目に
見える、行動したか、しなかったかだと思ふ。
口だけで何もしない善人より、たとえ偽善
でも人のために行動できる人の方が何倍も
いい。

正直僕は人に親切にするときに「親切に
して優しい!」と自分をほめることがある。
自己満足でしかなく、偽善なのかもしれない。
だがそれでも何もしないよりは良いと思ふ。
やらぬ善よりやる偽善。僕はそんな人間で
ありたい。

思いやりは大切にするだけではない

静岡市立清水飯田中学校 二年

中島 椿

思いやりとは何をしたら思いやりになる
のか。「人に親切にしたら」、「なにか人に
役に立つことをしたら」。

私はある日に、バスに乗りました。その
日は、お祭りがあったので続々と人がバス
に乗り込んできました。その途中でおじい
さんとおばあさん夫婦がバスに乗ってきま
した。でもバスには乗っている人が、たく
さんいたため、座る席がありませんでした。
私は荷物がたくさんあり動くことができま
せんでしたというのはい訳になります。
自分は勇気が出ず、「席どうぞ」、の一言が
言えませんでした。今の自分が未熟に思ひ
ました。でも違う日にバスに乗ったら、老
人のおじいさんがいました。その日も帰宅
ラッシュでバスに乗っている人が多かった
です。でも私は、「席どうぞ」といったの
です。バスを降りてからおじいさんに「席

ありがとうね」、と言われてとっても嬉し
かったです。年齢関係なく、「ありがとう」
と言われれば嬉しい気持ちになります。

私も自分自身で、「思いやりとはなんだ
ろう」と考えました。思いやりとは、自分
以外の人のために気遣いをする事、相手
の立場になって考え、思いを共有するこ
と、同情する気持ちです。でもあまり深く
考えなくても相手が「嬉しい」、「ありがと
う」と思えばそれは思いやりになると思ひ
ます。他にも、相手を大切にすることも「思
いやり」になります。

思いやりは、「何かを大切にする」だけ
ではありません。

私は、勉強に夢中で友達の方を言っているこ
とが分かりませんでした。私が、「なんて
言つた」と言う友達に、「だから…」、面
倒くさいとは思わず、もう一度、言つてく
れるのは、友達としても思いやりでもあり
ながら、人としての思いやりでもあると私
は感じました。

「長者の万灯より貧者の一灯」という話
を聞きました。神社に向かう暗い道を照ら

すたくさんの明かり。それを何でもお金で解決する大金持ち。しかし、貧ぼう人は、自分の生活が苦しくてもコツコツと貯めたお金で、その道を照らそうと、心がこもった、たった一つの明かりの方が、みんなを一層明るく照らしたいというお話でした。

真心がこもったことで、どんなに自分が苦しんでも、相手がよろこんでくれることで、幸せを感じることができるとは本当にすごいことだと思います。相手を思いやる気持ちをもつことで、みんなが笑顔で過ごせる毎日があったらいいなと思います。

わたしも、「思いやりの心」を大切に、そんな貧者の、一灯になれるようにこれからも、生活していきたいと思っています。

ほんの小さなことでも

静岡県立浜松西高等学校 中部部 一年

畑田 桜

私は家から遠くはなれた学校まで、電車とバスを使って通学しています。困っている人と会うことも多いのですが、中でも、一番印象に残っている出来事があります。

入学して二ヶ月がたった六月ごろ、友達といっしょに帰ろうと、駅のホームで電車を待っていたときのことです。すぐうしろにおじいさんが並んできました。そのおじいさんは、片うでがなかったのもそうですが、血管がむき出すほどのひどいすり傷があり、たれてくる血をハンカチでおさえていたのに衝撃をうけました。ハンカチは血で赤く染まっていたのを覚えています。声をかけようかとまどっていると、電車がやってきて、おじいさんの席の近くにすわりました。勉強をはじめようと単語帳を出したのですが、しばらくしておじいさんの方を見てみると、まだ血が止まっていなく

て、それどころか、血の出ている量が増えているように見えました。「かなりまずいことになっている」と思い、声をかけようと思いましたが、どうしたらいいか分からなかったし、何より声をかける勇気がありませんでした。あたりを見まわしてみましたが、気付いていない様子でした。気まずい気持ちのまま、かなりの時間がすぎてしまいました。しばらくして、おじいさんのとなりの席があきました。勇気があることだけど、となりにすわって声をかけてみよう、私にできることはそれだけだ、と思う、声をかけてみました。「大丈夫ですか。ひどいけがですけど……」すると、おじいさんは、私に「大丈夫だよ。声をかけてくれてありがとう。」と言ってくれました。まだ血が出ていたので、私は病院などに行って、手当てをうけてもらうようにすすめました。できることはないか、そこで思いついたのが、おじいさんのそばにいてあげることです。いるだけで少し安心するかもしれない。しばらくそのままとなりにすわっていました。降りる駅が近づいてきまし



入選

た。おじいさんが心配でしたが、おじいさんは私が降りる直前、こんなことを言ってくれました。

「ありがとう。心強かったよ。」

そのあとは何もできませんでしたが、「ありがとう。」という言葉が頭にひびきわたっていました。

私がこのときできたことは声をかけること、そばにいたことだけでしたが、少しだけ、人に「親切」にすることができました。身のまわりで起こることも、ほんの小さな「親切」だけで、助かる人もいるかもしれない。そんなことを思いながら、日々を過ごしています。おじいさん、私に大切なことを教えてくれてありがとう。

小さな親切

学校法人星美学園静岡サレジオ中学校 一年

増田 奈々緒

「お姉ちゃん、ありがとう。」

ペコリとお辞儀をして去っていったその子を見て私は嬉しくなりました。

先日私が一〇〇円ショップに行くと、小さな女の子が一人で折り紙コーナーにいました。女の子は上の方にある折り紙を取ろうとしているのか、頑張って背伸びをして時々ジャンプをしていました。私はその様子を見て、少し恥ずかしかったけれど思いついてその子に、

「取りましようか？」

と声をかけました。すると女の子は少し驚いた顔をして、その後こくりと頷きました。私が手を伸ばし、折り紙を一つとって、

「これが欲しいの？」

と聞くと、

「可愛い折り紙が欲しいけど見えないの。」とその子は言いました。それを聞いて私は、

上の方にあった折り紙を一種類ずつ全て手に取って、

「ここに気に入ったのあるかな？」

とその子に折り紙を見せました。その子はじっくりと見た後に、

「これ、可愛い。これにする。」

と言って星柄の折り紙を取りました。私が残った折り紙を元の場所に戻そうとした時、

「お姉ちゃん、ありがとう。」

と笑顔でペコリとお辞儀をして、その場から小走りで行っていきました。嬉しそうなお女の子の笑顔を見られて私も嬉しくなりました。そして昔、母と話したことを思い出しました。

私の母は優しい人で、困っていそうな人がいたらすぐに声をかけています。当時、私は母に、

「どうしてみんなに親切なの？知らない人に声をかけるの恥ずかしいの？」

と気になって聞いてみたことがあります。すると母は、

「困っている人に声をかけるのは当たり前のことだよ。」

と言ってそれに、と話を続けました。

「それに、誰かを助けたらその人も又、別の誰かを助けてくれるかもしれない。それが続いていって、もし奈々緒が困ってる時に誰かが助けてくれるかもしれないですよ。」

と笑顔で言う母をすごいなと思いました。

今回私は、少しの勇気を出して女の子を笑顔にすることができました。まだ少し緊張することもあるけれど、母の言葉を胸に困っている人に当たり前に声をかけられる人になりたいです。そして、私が優しくした人が周りの人にも優しくして、その人がまた次の人に…と繋がっていった、いつかみんながみんなに優しくできるようになるといいなと思います。そのためにも、まずは自分から一歩勇気を出して頑張りたいです。

僕が今一番伝えたいこと

静岡市立城内中学校 二年

松下 大河

この夏、僕は広島へ旅行に行った。目的は、戦争について学ぶためだ。一泊二日の旅行の中で、原爆ドームや広島平和記念資料館、袋町小学校平和資料館に訪れた。終戦から七十九年が経つが、広島には戦争を感じ場所や物が多く残っている。広島市内を歩くと、慰霊碑があったり被爆樹木が残っていたりした。広島に住む人々は、広島で起きた戦争を常に感じながら生活を送っているのだと思った。今回の旅行では、路面電車を利用しながら徒歩で被爆に関する資料館をめぐるっていったのだが、僕と母、小さい弟が歩くにはとても長い道となり。旅の途中では広島の人々に助けてもらう場面が多くあった。例えば、エスカレーターに乗っている際、弟がバランスをくずしてしまい、体がふらついてしまったときに後ろの方が弟の体を支えてくれ

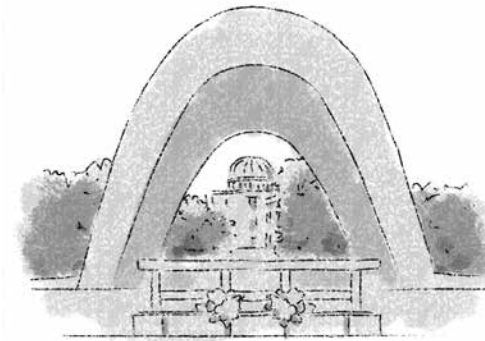
「大丈夫ですか」と声を掛けてもらったり、道に迷っている時に声を掛けてくれ、道案内をしてくれたり、そして「写真を撮りましょうか」と声を掛けてくれたり、様々な親切が僕の広島旅行を支えてくれた。自分もその人たちのようになりたいと思いながら、過ごしていると、一人の子供がコンビニエンスストアで飲料の機械の使い方がわからず、困っているようだった。僕はとっさに体が動いた。教え終わると子供はお母さんの方へ走っていった。親切をして、とても気持ちの良い瞬間だった。親切を人にしてもらって、僕も自然と人を助けたいと思うようになっていた。親切は連鎖する。また広島旅行を通し、感じたことがある。それは戦争当時、人々は自分自身が辛く、大変な中でも助け合って、生き抜いたということだ。壁に伝言を残し、家族や友人の情報を伝えたり、体を動かすことが難しい中でも、生徒である女の子の看病をしたり、様々な助け合いが一人の命を救ったり、色々な人に希望と安心を与えていたと思う。



入選

僕は今回、広島に平和と戦争について学びに行ったが、旅行先で人々の親切に触れることが出来た。広島という町は、目を覆いたくなるような悲しい過去を持つ街だが、そんな過去を持つからこそ、友人や家族、そして周りの人を思いやる気持ちが強く人々の心の中にあるのではないかと思った。

広島から静岡に帰ってきて、戦争の悲しみや平和について僕が学んだことや広島で触れた人の温かさを多くの人に伝えていきたいと思った。



誰かのためになるのであれば

静岡県立浜松西高等学校 中部部 一年

水主 優

私の住んでいるマンションの玄関にはツバメの巣がある。そして毎年の様にツバメがやってきて子の世話をしてはまた巣立っていく。そんなやりとりを私は当たり前の様に見てきた。そして案の定今年もツバメはやって来た。

桜が散り、若葉が生えてきた頃、ツバメの赤ちゃん達も卵の殻を破り、孵化してきた。暑い中、五羽の赤ちゃんがギューギューに巣に詰まっていた。今までずっと卵を温め、身動きしていなかった母のツバメも一日中せせと虫を捕まえ子にやってはまた飛んでいった。例年どおり頑張ってるなと大して気にしなかった。それが「普通」だと思っていたから。だが今年が私が思っていた「普通」ではなかった。

その日もやっぱり暑く、私はお母さん

と出かけるのだが、あまり乗り気ではなかった。玄関まで来た時、私は自分の目を疑った。そこには生まれて間もない赤ちゃんツバメが落ちていた。さらにまだ幼いために皮膚にある血のにおいを嗅ぎつけたのか、アリの群れが赤ちゃんツバメの周りに群がっていた。どうしよう。狭すぎて落ちたのかな。私が焦っている間にお母さんは上へとんで行き、しばらくすると軍手と虫退治スプレーと折りたたみ式のイスを持って玄関に戻って来た。そして黙ってア리를追い払い、赤ちゃんツバメの周りについている汚れを落とし、元の巣へ戻してあげた。お母さんは虫が苦手でアリの集団は初めてだから想像以上いきっと恐かっただろう。だが、だからといって「誰かがやるのを待つ」のではなく、勇気をふりしぼって赤ちゃんツバメをお母さんは救った。突然の出来事にとまどいながらも私はお母さんに感謝した。誰からも感謝される訳でもなければ、誰からもお礼の物ももちろんもらえない。だけどお母さんは満足そうだった。

私は今まで人にお礼を言われたくて頑張っていた。だが、今回のお母さんを見て、「親切」は必ずしもそういうただけにやるものではないと思った。誰にも知られなくても誰かが幸せになるのだったら大きな事に限らず小さな事もやっていきたい。また、誰かがやるのを待つのではなく、自ら進んで物事をやっていきたい、そんな事を考えているうちに、お母さんは使った物も戻して私になんてことないよという顔で「さあ、行こう。」と言った。もうただのお出かけではない。私の中で一番ほこり高いお母さんとのお出かけだった。

濃い緑色の葉が生いしげる頃、五羽のツバメは元気に飛び立った。決して当たり前ではない動物達の生活。初めて、全員が無事に飛び立った事を嬉しく思った。それと同時にお母さんってこんな一面もあったのだと思うととってもほっこりした気持ちになった。

いつか私も誰かがこんな気持ちになれるような人になりたいと思った瞬間でもあった。

助けられた一日

浜松市立与進中学校 二年

宮本 翼牙

僕は、バスケットボール部に所属している。ゴールデンウィーク初日、僕の中学校で他校との練習試合が行われた。そこで、ジャンプの着地で相手チームの足を踏んでしまい、捻挫した。腫れと痛みもあり、初めての捻挫で心配だったので、当直医を受診した。

「骨には異常はないが、靱帯損傷しているから、固定した方がいいね。絶対安静だよ。」

と言われて、初めての松葉杖生活になった。ゴールデンウィーク中は、どこにも出かけず、ほとんど自分の部屋で過ごしていた。

いよいよ休み明け。いつもの学校生活が始まった。そこで、僕はいろいろな小さな親切に助けられた。まず、歩いて登下校ができないため、出勤時間の早い母が会社を

遅刻して、送迎してくれた。学校に着くと、顧問の先生が僕の登校に合わせて、校門の前で待っていてくれた。雨が降っていたため、車から降りた僕にサツと傘をさしてくれた。僕のクラスの教室は、三階だ。階段を登るときに片方は、手すりで登るため、松葉杖の片方を誰かに持つてもらわないと登れない。朝、学校に登校すると友達がいって、片方の杖を持ってくれて、手助けしてくれた。

僕は、学級委員をしている。その仕事の中には、移動教室のときの教室の鍵の開閉。授業前には、黒板の前に立ち、黙想の声かけ。それを全て、もう一人の女子の学級委員がやってくれた。給食の時間。僕の給食は、友達が運んでくれた。下校するときも、「誰か松葉杖、持ってくれない。」

と頼むと友達がサツと持ってくれて、階段を降りることができた。

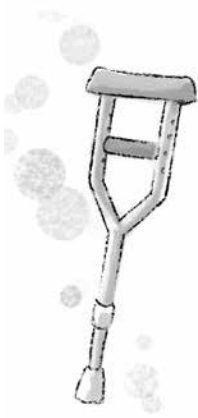
初めての松葉杖での学校生活。家に帰ると腕は、筋肉痛でヘトヘトだった。しかし、体が疲れていたけれど、心が満たされていた。なぜなら、今までにこんなにもみんな



入選

から親切にされた日は、なかったからだ。僕は、人にものを頼むのが苦手だ。断られても嫌だし、自分でやった方が早いからだ。しかし、今日の僕は、そんなことを言っている場合じゃなかった。一人で階段の登り降りすらできないくらいだったから。けれども、誰一人嫌な顔をせず、引き受けてくれた。僕がお願いしなくても、動けない僕を思っみんなが動いてくれた。本当にみんなに助けられた一日だった。

僕は、松葉杖生活になり、親切にしてもらい支えてくれる人の大切さを知った。こんなに感謝した日も初めてだった。何気ない親切が、どれほどありがたいものか。今度、僕と同じように困っている人がいたら、その人がお願いする前に積極的に助けにしようと思う。



親切ってなんだろう？

富士市立鷹岡中学校 一年

望月 侯志

(どうしよう?)

学校の帰り道、僕は重そうな荷物を持ったおばあさんに会いました。持ってあげることが親切だと思っはいたけれど、知らない人に話しかけるのが苦手な僕は、手伝ってあげることができませんでした。

そして、僕は、家に帰っても親切について考えるようになりました。人によっては、手伝ってもらうのがいやな人もいるのかな、逆に手伝ってほしい人の方が多いのかな、など疑問がたくさん出てきたり、断わられたらいやだな、そもそも話しかけられないな、という不安もあふれてきました。

そんなモヤモヤした気持ちカラッと晴れたのは、ある一つの授業がきっかけでした。その授業は、親切や思いやりについて考える、今の僕にぴったりの授業でした。この授業で僕は、自分なりの答えを出そう

と決心しました。自分の意見を周りに伝えたり、友達の見解を聞いたり、一生けん命この授業に取り組みました。そして僕は、相手のために力をつくすことが親切だと分かりました。今までは、相手のためとは言いつつも、結局、自分がほめられたいだとか、自分の利益の方を優先してました。でも、その一時間を通して、自分の笑顔ばかりを優先するのではなく、相手の笑顔を優先すべきだということを学びました。

また、それと同時に、自分の大切さについても学びました。親切がいつでもできていれば、良いことだけど、周りを気にしすぎて、自分を失うことが一番良くないことだと思ったので、自分の心と体に余裕ができてから、周りを見れるような人になりました。

僕の親切についての最終的な答えは、自分も相手も笑顔になることです。僕の性格上、周りのことを気にしすぎて、自分のケアが足りていないことが、よくあります。クラス内で起きたけんかの解決方法について考えすぎて、充分にねむれなかった

り、クラスのけいじ物を一人で全てけいじしようとして、自分の時間が少なくなってしまうたり、自分が犠牲になっても周りが笑顔になればそれでいいという親切でした。でもこれからは、周りのことを気にしながらも、自分の時間をしっかり確保して、自分も笑顔になれるような親切をしたいです。そして、前は話しかけることすらできなかったおばあさんに、優しく声をかけてあげたいです。

声をかける勇氣

富士宮市立大富士中学校 一年

山下 風那

私の母は、誰にでも声をかける。それは、おせっかい焼きとも言える。私は、そんな母と一緒にいると、そんな姿を少し恥ずかしいと思う時もある。この前も、スーパーで、店員さんに道をたずねているおじいさんがいて、店員さんが分からないと困っているところに割り込んでいって、道を教

えたという話を聞いた。そんな話を聞くと、いい事をしたという母のじまん話を聞いているみたいに感じて少しイラつく事もあるが、おばあさんからできる事だと思ったりしていた。母は自分が助けられないと分かっている、知らない人に声をかけたりすることもある。

今回、この作文を書く決めて、自分がどれだけ親切なことをしているのか考えてみた。ずいぶん考えたけど思いつかない。

母に聞いてみると、

「困っている人がいたら声をかけてあげることかな。若い時は私も恥ずかしがり屋だった。今まで、色々な経験をして、助けられたり、助けたりを繰り返し、声をかける勇氣が少しずつ大きくなったのよ。困っている人を助けたい気持ちさえあれば、あなたもいつか勇氣を出すことができるはず。」

と教えてくれました。そして、自分が困った時も助けの声をあげる事も必要と母は言っていた。それは、仕事でもプライベートでも同じで、要するに、コミュニケーション

ンが一番大切なんだそう。

私は、話すのが苦手だ。仲のいい友達から言いたいことがはっきり言うことができず。友達が困っていれば、「大丈夫？」と言っている。よく考えたら、これも小さな親切だと思ふ。自分が困っていたら、声をかけてくれるだけでうれしい。何もしてあげられなくても、一緒にいてくれることがうれしいのだ。

今は、まったく知らない人には、声をかける勇氣はない。でも母の言う通り、少しずつ成長していきたいと思う。

中学生になつてはじめて、夏休みに、地域のお祭りのボランティアに参加した。仲のいい友達と一緒に焼きそばの販売をした。緊張したけど、友達と一緒にだったから、知らないお客さんにも、しっかりとあいさつができた。勇氣を出して、やり取りができた。お客さんが楽しんでくれたなら、これも親切と言えるだろうか。

母の言う通り、こうやって、少しずつ話しかける勇氣を大きくしていき、困っている人がいたら、助けになりたいと思います。



入選

「体験して気付いた事」

湖西市立鷺津中学校 三年

若林 咲

毎年、私は夏休みに長野にある祖父母の実家に帰省しています。普段は空き家になっているのですが、夏休みにお墓参りを兼ねながら、掃除や換気などをして、数日間過ごします。そうすると、お隣の家のおばさんが、毎回私達の為に、お菓子やご飯のお裾分けをしてくれます。いつも一年振りに会うと、

「大きくなったね。」

と、言ってくれて、毎年とても嬉しい気持ちになります。

幼い頃は、当たり前のように、何で行くのか、お隣の家のおばさんの事も良く知りませんでした。ですが、自分も徐々に小、中学生と成長するにつれて分かるようになった事があります。それは、人の親切が当たり前ではないという事です。

去年、ニュースでよく目にする空き巣の

被害が私達家族に、長野の家で起こってしまいました。庭の手入れをお願いしている親戚のおじさんから祖父母、母へ、

「窓ガラスが小さく割れていて泥棒が侵入した気配が……」

と連絡があり、母が祖父母に代わって長野に駆けつけました。ニュースで被害にあった様子やインタビューを見た事はありませんでしたが、他人事ではないんだと思ひ、びっくりもしましたが、少し怖くなってしまいました。

その時もお隣のおばさんが、母の心配をしてくれたり、色々と助けてくれたと母から話を聞きました。その時、母は私に感謝の気持ちと、おばさんの行動はなかなか出来るものではない事、当たり前だと思ひにくいという事を教えてくれた時が私に、親切について考えるきっかけとなる出来事になりました。今自分は周りに親切に出来ているだろうか。

現在都会や私達の暮らす湖西市では、隣の人とは疎遠で話す時がないのが現状だと思います。例えば、コロナを機に回覧板な

ども直接渡すのではなく、ポストや玄関に置いておくのが当たり前になっていると感じます。私が毎日経験している優しさ（親切）が当たり前ではなく、珍しくなっています。人と接する時の都会、田舎の違いに改めて驚きました。コロナが影響している事を言い訳にしたいくない自分がいます。

私は、経験した親切を、今度は返す側（親切にする立場）になって行動しようと思ひます。私の母のおばあちゃん、祖父母、母がしている事がめぐりめぐっている事に気付いたので、おばさんがしてくれた事に対しての感謝の気持ちを忘れずに、残りの中学校生活と、これから大人になっても自覚して、行動していきたいです。